

ベトナム(越盟)

柳井 泰司

大成建設(株)ベトナム連絡所 連絡所長



1. はじめに

私は現在、駐在10年目(出戻りのため、「通算15年」とも言う)を迎えたベトナムの首都ハノイで現地首席駐在員として業務にあたっている。ここ数十年ですさまじい変貌を遂げている『ベトナム』をここに紹介する。

2. 概況

ベトナムはインドシナ半島の東に位置し、北が中国、西がラオス・カンボジアに接し、3,200kmもの海岸線、南北に長い半面、東西は最も狭いところでは50kmにも満たない非常に細長い国土で日本の九州を除いた面積を持つ。統治形態は社会主義という名の共和国であり、58の省と5つの中央直轄市(ハノイ、ホーチミン、ダナン、ハイフォン、カントー)からなる。人口は8,800万人、そのうち首都ハノイと南部のホーチミンにそれぞれ10%弱がひしめき合っている。人口構成は度重なる戦争の影響からか、日本の60年代と酷似しており、0-14歳が全体の30%を占め平均年齢は28歳、毎年150万人ほどが労働市場に参入しているという非常に若い国である。

3. 歴史と時代変遷

紀元前2880年ころの雄王(フンヴォン)の文郎国が国として統治された形態の最初とされている。ちなみに、雄王というのは名前ではなく王様の呼称で、彼らの子孫も王を継ぐと雄王と呼ばれていた。この雄王に関しては有名な伝説があり、数いる息子の中から誰を後継ぎにしよ

うか迷った王は、息子全員に「私のために特別な料理をつくりなさい! 一番うまい料理をつくった人を後継ぎにする!」と命じ、それぞれが肉だか魚だかの豪華な(?)料理をつくってきたのに対し、一番下の息子だけが米だけでつくった料理を持参した。米だけの料理かと最初は皆に笑われていたのだが、王様が実際に食べてみるとあまりのおいしさに感動し、「庶民でも手に入る米でこんなうまいものをつくったということは庶民のためにもなる。次の王様になるのはお前だ」と言ったという。こうして毎年テト(旧正月)の時期になるとどの家庭の食卓にも上がるバインチュン(ベトナム版ちまき)ができて上がったのである。

北部においては、紀元前111年からは漢による支配が始まり、西暦938年までの約千年の間、中国によって支配され続けた。その後、独立したベトナムは首都をハノイの南90kmのホアルーに置き統治する。1010年の李朝からは首都をタンロン(現在のハノイ)に移し、途中中国の明の支配もあったが陳朝-黎朝と続き、1802年には南部でチャンパ王国の衰退を機にフランス、イギリス、タイ、カンボジアの力を借りて勢力を広げた阮朝が初めて南北統一を果たす。この後、100年にわたる辛いフランス植民地時代に突入するが、そのきっかけをつくったのがこの阮朝とも言われている。1840年のアヘン戦争後から始まったフランス植民地政策は、それまで使用してきた漢字表記の言語をローマ字表記に変え、またベトナム独自の文化も否定し、塩の専売権も持ち、そして開



開発が進むハノイ西地区1



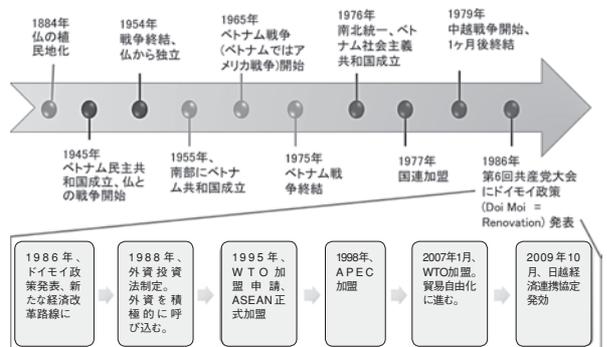
国際会議場と70階建て商業ビル

墾した土地をフランス人に分け与える、などとベトナム市民を非常に苦しめた。1940年、フランス統治下のベトナムに日本軍が進駐。そして、1945年8月15日、太平洋戦争が終結し、ベトナムを占領していた日本軍が連合国に無条件降伏すると、8月16日、「ベトミン」(フランス植民地からの独立を求め第1次インドシナ戦争を戦った独立運動組織)は総蜂起し、9月2日にホーチミン主席がベトナム民主共和国の独立宣言を行い、ベトナム民主共和国が建国された。この後も泥沼のベトナム戦争へと発展し、1975年まで続くのだが、そこでも「ベトミン」は全国で反撃し、ディエンビエンフーの戦いでフランスに勝利、テト攻撃ではアメリカ大使館の一部を占領し劣勢のアメリカ軍はニクソン大統領のベトナム戦争終結宣言をもって南ベトナムから撤退を強いられた。ベトナムの歴史を一言で言うならば「支配からの反抗の歴史」と言える。

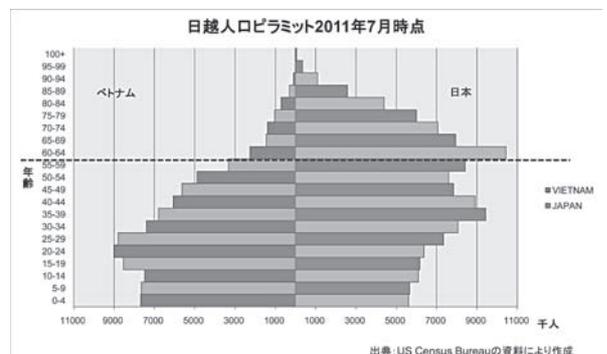
4. 政治体制

政治体制は、1930年からのマルクス・レーニン主義やホーチミン思想を掲げた共産党の一党体制である。政府の政策はトロイカ体制と呼ばれ、党の指導者である書記長(NO.1)、国家元首である大統領(国家主席、NO.2)、行政府の長である首相(NO.3)、の3人が巨大な影響力を行使する。また、日本と同様に、立法・行政・司法の三権分立制としているが、要職はすべて共産党員で占めているため、相互を監視や抑制することはないことから「三権分業制」とも言われている。各地方自治レベルでも、上位から省：Province(市：City)、県：District、町：Commune、村：Villageという構成であるが、おのおのに人民評議会が存在し、人民評議会によって地方行政の執行部隊である人民委員会が選出される(先の選挙ではホーチミン市で3名の芸能人が初当選を果たした。どこの世界でも実力より人気が先行するようである)。しかしながら、首相は各地方省・市人民評議会の決議執行停止および人民委員長長の罷免を行う権限を持ち、ベトナムには地方自治という概念が存在しないとされている。

現在のベトナム共産党の組織は、本年1月の第11回党大会において、約370万人の党員の代表1,377人が5年に1度の党大会に出席。そこで175名の中央委員会メンバーの選出ならびにそのメンバーによる政治局員(15名)、書記局員(4名)の選出が行われた。また、閣僚は中央委員会メンバーの中から選ばれた。



ベトナムの歴史



ベトナム人口構成

都市名	人口(万人) 2009年時点	最低賃金 2011年1月時点	
ハイフォン	188.4	4135万(FDI) 4120万(地場)	北部最大の港湾都市。北部で製造した物の輸出身。近年工業団地がハイフォン側に移動していく傾向も。
ハノイ	645.2	4155万(FDI) 4135万(地場)	ベトナムの首都、第二の大都市。2008年の行政区合併により人口が600万人を突破。
ダナン	88.7	4135万(FDI) 4120万(地場)	中部の港湾都市。主要貿易港のひとつ。ハノイとホーチミンからの商品の交換地。
ホーチミン	716.3	4155万(FDI) 4135万(地場)	旧名サイゴン。ベトナムの商業中心で、第1の大都市。周辺には多くのメーカーの製造拠点がある。
カンター	112.1	4135万(FDI) 4120万(地場)	メコンデルタ最大の都市。メコンデルタの経済中心になると期待されている。

ベトナムの主要都市(中央直轄市)

5. 経済

「刷新」の意味を持つドイモイ政策が1986年に提起され、それからちょうど四半世紀、2010年の実質GDP成長率は6.8%で2008年のリーマン・ショック前の水準にまでたったの1年で回復した。ひとりあたりのGDPも1,174ドルとなり、2010年末のCG（ベトナム支援国）会合では「中所得国」と正式認定された。堅調な経済成長を裏付けるように都市部での自動車・バイクの交通量の増加は目を見張る（目を覆いたくなる）ものがあり、昨今ゴルフ場やスポーツクラブ、ショッピングセンター、一流ホテルのレストランなどでも多くのベトナム人を目にする。また、一杯40ドルもするフォー（ベトナム版うどん、庶民価格は1~2ドル）も登場し、そこもベトナム人セレブでごった返している。

一方で、20%を超える消費者物価の上昇（前年同月比）、120億ドル強の貿易赤字そして、ベトナムドン通貨の下落が続いており、政府としては「輸出の促進、金融引締めそして公共投資の削減」を図り、今までの行け行けドンドンの経済成長路線から軌道修正を講じている。このことはベトナムの株式市場にも影響を及ぼし、ベトナム経済ならびに企業への高い期待から積極的に資金を投じてきた外国人投資家が資金提供を一時的に引き上げている。金融引締め政策は負の企業活動を与える要因となるか、状況を見守りたい。



40ドルの神戸牛フォー

6. 建設事情

一言でいうと、今なお建設ラッシュである。2008年からの不動産バブルに乗じて土地を買い漁り、更地なり基礎工事だけを完了させて転売する手法が蔓延し、現在も似つかない場所に雑草が茂り、万能鋼板に囲まれた空地が点在する新興住宅地域や郊外の高規格道路沿線地域もあるが、中には60階超級の高層ビルをいとも簡単に着手し完成させる韓国旧財閥系建設会社もあり、またその周辺は一見コリアタウンと化して、今どこにいるのかと錯覚を起ししかねない様相を呈している。

公共のインフラについては、日本とよく似た国土を有するここベトナムではあるが、まだまだ数量的にもメンテナンスを含めた運営能力（質）的にも劣弱であると言える。下に代表的な公共施設の比較を行った。

- ・国土面積：333,000km²（日本：370,000km²）
- ・鉄道延長：2,600km（日本：27,000km）
- ・道路延長：220,000km（日本：1,270,000km）
- ・火力発電所：12カ所（日本：119カ所）
- ・国際港：49港（日本：126港）
- ・空港（旅客）：22港（日本：94港）
- ・下水処理場：5カ所（日本：2,000カ所）

7. 終わりに

今年の国際物理オリンピックでもベトナム人の学生が5つのメダルを獲得、また生物・数学オリンピックでも素晴らしい活躍をしている。近年、ベトナムは「教育の社会化」政策を進めており、これは幼児教育を含め、社会全体で教育を支えるという意味らしい。子育て・幼児教育が「私事化」した日本に比べ、ベトナムでは地域住民が協働して子どもの教育を支えていくという意識が強く、優秀な子どもには周辺住民や親戚一同が学費を出し合って大学に行かせて、「おらが村の○○○」となっていく。竹槍を持って対峙し、独立を勝ち取ったベトナム魂が今なお、別のかたちで民衆の間に浸透していることを頼もしく思う。